

令和六年二月吉日初版作成

神聖復活の印を最大限
有効にする

高嶋善三郎

目次

- 世界平和のために変化を起こし続けるには・・・・・・3
- 神聖復活の印を最大限有効にするには・・・・・・4
- 新しい神聖復活の習慣とは・・・・・・5
- 人間神の子観と闇の面の消えてゆく姿・・・・・・6
- 己自身がやらねばならないこと・・・・・・6
- すべてを自ら自身と観する心・・・・・・7

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ） 090-33346-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

世界平和のために変化を起こし続けるには

世界平和のために変化を起こし続けるにはどうしたらいいですか。
というご質問にお答えします。

現在の動向と見直しするべき点についてみてみましょう。

この世界の天変地変や民族間の紛争は、私達人類が神聖であるにもかかわらず、物質世界に起こる諸現象に翻弄され、神聖を見失ったことにより起こっており、天変地変や民族間の紛争のない、愛と調和の世界を取り戻すには、私達人類一人一人が神聖を復活させるしかないのです。

これまで、聖者賢者が現われ、神聖を復活する意義やその方法を教えて導いてくださってきており、そして二万六千年に一度起きる宇宙根源の光が地に降りてきて、人類が一斉に神聖に目覚める時期を迎えているのです。現在ほど世界平和のために変化を起こせることはないのです。

そうした中、2015年昌美先生、裕生先生やブタバスト・クラブの創設者・代表のアーヴィン・ラスロ博士やノーベル平和賞を受賞し

た方々を中心とした世界の平和を推進する指導者たちが、豊かで調和した世界を協力して築いていこう、別の言葉で言えば、「神聖なる精神の復活とすべての生命が一つにつながる文明へむけて」というという趣旨のもと人類一人一人の意識の変革と分野を超えた共同を呼びかけ、個人と団体がつくりあげた交際的なネットワークを立ち上げたのです。それが「富士宣言」なのです。

その中で、一人一人の宣言として次のように四つ示されています。

○私たちは未来世代にして責任ある個として、人間の本质である神聖なる精神と善なる心を復活させ、みずからの上に顕現すること。

○地球上に真の平和を築くという人類共通の使命を自らの生き方と行動を通して果していくこと。生きとし生けるものは多様性でありながら一つにつながっていることを認識し、すべての生命を尊重し、生き生きと活かすこと。

○人間の精神の限り無い創造性を発揮し、経済、科学、医療、政治、教育、宗教、芸術、メディア等あらゆる分野に必要な変容をもたらすために尽力すること。

○調和した精神文明を実現するために一人一人が内在する素晴らしさを顕現し、人類の進化に向けた大きな一歩を共に踏み出すこと。

そして、2017年にその活動を活性化するために、神聖復活の印が私達神人に降ろされたといえましょう。

私達神人がやるべきことは、まず自らの肉体を通して宇宙根源の光をこの地上に降ろし、自ら神聖復活し、そして神聖復活の印を人々に広め、人類各自が神聖復活を遂げられるようにサポートすることです。

神聖復活の印を最大限有効にするには

これまで私達神人は、人類の平和達成のため、ひたすら神聖復活の印を組み、宇宙根源の光を降ろし続けて来ていますが、五井先生は、降ろす回数を重ねることも大切であるが、それだけでは神聖復活の印により降ろす宇宙根源の光は限りがあり、それを最大限にするには、降ろす私達自身の意識を宇宙根源の光に向け、受け入れ、私達に内在する神聖と同調（一体化）させる意識が重要である。そのためには、日々自分の想念の習慣を新しい神聖復活の習慣に変えるよう努力しておくことが大切であると言われているのです。

私達が今改めて見直すべき点は神聖復活の印の効果を上げることであり、五井先生のこの指摘は私達に大きな示唆を与えてくれます。

これらの内容については、すでに整理されている『自分が変われば、すべてが変わる』や『自分を磨く』において言及していますが、その要点について改めて整理します。

『白光誌』2021年4月号において「究極の真理をどう受け取るか」において五井先生から昌美先生に伝えられた「…最後にはっきり汝らに言い聞かせる、と五井先生は前置きされ、次のように語られた。究極、自らを救うのは、宇宙神でもない。五井先生でもない。守護霊守護神でもない。昌美でもない。自分を救えるのは、自分自身以外にない」があります。

またこのお言葉に関連して、『白光誌』（2020年1月号）において、「物事は変らないのだ、人を変えよう、物事を自分のほうにもってこさせようと、これは自分に必要なものだと言っても物事は変えられない。自分自身が変わらなければ無理なのだ。それをやらずに、他人を批判することは誰でもできる。事実、愚か者ほど他人を批判したがる。最も素晴らしい人は自分の神性を知っている人だ。批判もしなければ、人に媚びて、いたずらに褒めることもしない。神性そのものが現われているので、人が自然と寄って来る。だから、自らの習慣の想い

を変えらるゝことだ。習慣の自分が出たら、それは新しい神聖復活の習慣をつけるチャンスなのだ。神聖復活の印を何千何万と続けている人々も、初めはそうだったのだ。自分の習慣の想いを神聖復活に変えさえすれば、何でも成就できる。誰が無理だと言おうとも、自分に、出来る絶対によってみせるという強い信念と意識があれば、必ず出来るのだ。」と解説されています。

以上は神聖復活の印の効果があまり感じられない人たちにその効果を感じられるためには何が必要かを示された内容といふべきものです。

新しい神聖復活の習慣とは

ここで、新しい神聖復活の習慣を身につける方法について整理してみましよう。

その前に、ここで言われている自分の習慣の元になっているものの観方は、どういふものかを整理します。

それは、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心等、自然（じねん）の心に相反する業因縁の心なのです。

この心が習慣化されると、自己の想念行為によってつくった環境を輪のように廻りつつけることとなります。つまり自己の想念行為のままに、生まれ更りして、肉体界と他界（幽界、霊界の下層、ヨガの教えでいえば、肉体、アストラル界、メンタル界）を往ったり来たりして生活してゆくこととなります。この状態を輪廻といい、自己の想念行為の波に乗って廻りつつけるという法則が出来ており、輪廻転生の流れ（貧老病死の苦界）がつくりだされ、この世界から解脱できなくなります。

このようなになったのは、光一元の世界からこの間の肉体界を愛一元の世界にするために意識波動を下げ、この肉体界に降りてきて、霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動していた私たちは、しだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていったことによります。

人間神の子観と闇の面の消えてゆく姿

一方新しい神聖復活の習慣の元になっているものの観方は、人間神の子観です。『神は沈黙していない』より整理します。

神様は全体であり、神の子人間は、全体の光明が、光線となって別れ別れの働きをしているので、人間同志は決して、お互いに孤立したり自己主義になるべきものでない。そこで、神の心の中に、自己も他もすべての人類をも入れ切ってしまうと、日々生命新たに、光明燦然と生活してゆくことが絶対に必要なのだと言われているのです。

この観方は、お互いに孤立したことにより生じた、不幸、悲しみ、恐怖、恨み、妬み、憎悪、不平、不満等々の想いや行為を、人間の真（神）性から出るものではなく、この世の中を、神の子人間が歩みつつけてゆく時に削りとられてゆく、闇の面の消えてゆく姿である、と全否定してゆく、断々固たる人間神の子、仏の子観なのです。

神性の人間を肯定するのに、肉体の想いで肯定しようとするのは無理なのです。肉体の人間の想いにはやはり業生の世界の様相しかうつらない。そこで消えてゆく姿、という言葉を使って、一度、肉体人間

そのものさえも、全否定しきっている。しかし、それを大げさに、肉体無し、などと説かず、只何気ない言葉として消えてゆく姿を使い、あらゆる肉体世界の想念や出来事を、その消えてゆく姿という想いに乗せて、神の世界、神の心である、大光明の中、完全性の中、そして各個人に内在する本心神の中に融合させてしまう習慣です。

この神本来の本心の世界は、生き続ける生命である、即ち無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心で、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界、即ち神性の世界なのです。

本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していく。肉体意識がいかなる不安恐怖の感情に襲われても、動揺もなく、ただ喜びと感謝に包まれ、必要に応じ、無限なる叡智など無限あるすべてを現わし、満たす存在です。

己自身がやらねばならぬこと

また、自らを救えるのは、自分自身以外にないというお言葉の裏には、次のような真実があるのです。

守護霊は霊界、幽界、肉体界と三界、を通して働ける者なので、幽界において、できつつある運命、あるいはすでにできあがって、時間の経過につれて自然に肉体界（現界）の運命として現われぬように自分が引き受け、修正してくださっているのです。修正するのは現わす業想念（誤てる想念）の90%で、後10%は本人の魂を磨くため業想念（誤てる想念）を夢などにして現わすのです。現われれば消えるのが想念の性格であるので、守護霊が夢等により、大難を小難にして現わし、消してくださっているのです。この10%の業想念については、己自身で真理につながり、本心の光の中に融合させ、光に還元し、修正しなければ、己自身の魂は磨かれず、業想念を新たにつくってしまうのです。守護の神霊がせっかく修正してくださったものまでも無駄にしてしまうことになるのです。

これだけは、神との一体をさらに深め、魂を磨き進化するために、己自身がやらなければならないものなのです。

また、自分自身の業想念を光に還元することをスムーズにおこなうためには、常に内なる神（本心）の中に入れる（統一する）よう習慣

化することが必要なのです。

すべて神に全託しているのだから、自分は何もしなくてもよいという考え方があがるが、このような考え方になるのは、全託の意味を正しく受け止めていないことによるのです。全託の意味は、真理に繋がり、すべてを神に委ね、肉体人間の想念行為中心の生き方を棄て、人間神の子観にもとづく生き方をする事なのです。人間神の子観にもとづく生きていくことは、既に整理したとおり、努力をすることは無限にあるのです。

すべてを自らの自身と観ずる心

新しい神聖復活の習慣の根幹となっている、神我一体観（人間神の子観）と自他一体観について、整理してみましよう。

「人間は霊であり、肉体はその一つの現れであって、人間そのものではない。人間とは神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に形の上の創造を遂げてゆくものであると識り、神我一体観、自他一体観を行動として表現してゆく」という天命を私たちは担っています。

結論から言えば、神我一体観と自他一体観とは、一体のものであり、自他一体となるには、神我一体にならなければ、達成不可能であり、自他一体が深まれば、神我一体はさらに深まるという関係なのです。

『愛する心』によると、人間は肉体界に住みながら、神霊の世界に住んでいるのであり、想念が神霊の世界のひびきに通ずれば、神霊の世界にその人の生活の重点が置かれるのであり、その人は肉体界に存在しながら、神霊のひびきである、高い深い叡智に導かれて生活できるのです。

また『続宗教問答』の問92「神様の中に入るといことは、現実逃避ではないかと人にいわれたが、いかがなものか。」でも、神我一体観と自他一体観との関係について言及されています。

宇宙の法則に乗るとは、自分が神のみ心と一つになって生きていくことであり、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立っている状態といえる。何故ならば、神のみ心は、大調和であって、すべてを生かしきることに、その目的があるからである。自己の生命を自由に生かしたい、のびのびと平安に生きてゆき

たい、と思うならば、まず自己の心を自由の根源であり、生命の根源である、神のみ心の中に入れきってしまつてしまつていなければならない。

神のみ心の中に自己を入れ切るということは、神のみ心と同じような心で生きてゆくことである。神のみ心とは、まず、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観する心、人間の側からいえば、自他一体の心ということになる。別の言葉で言えば、愛ということになると五井先生は言われているのです。

私たちは、新しい神聖復活の習慣を身につけることにより、業想念の波の中に生活しながらも、同時に神界にも存在できるようになったのであります。

今回の資料は、神聖復活の印を最大限有効にするための方法を中心に整理しましたが、宇宙根源の光の受け入れる仕方だけでなく、日々の生活を人間神の子観中心にすることがいかに大切なのかを教えてくださいました。そして私達の神聖への意識が高まるにつれ、神聖復活の印により降ろされる宇宙根源の光は多くなり、そしてその降ろされた光の量に応じて、自分の内なる存在の神聖は輝き出し、深まって来ることになります。